

2022年1期7課 魂の錨イエス

【暗証聖句】「わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり、また、至聖所の垂れ幕の内側に行くものなのです。イエスは、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行き、永遠にメルキゼデクと同じような大祭司となられたのです。」ヘブライ人への手紙 6章 19、20節

【今週のポイント】

【日・み言葉のすばらしさを味わう】

ヘブライ人への手紙6：4、5節「ひとたび光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力を味わいながら…」

ここに、クリスチャンがどれほど素晴らしい体験へと導かれてきたのかが語られています。それは、イエス様と出会って命の光に照らされ、闇から光に移されたこと。この世にはない天からの賜物をいただいたこと。聖霊に満たされ、愛と喜びと平和にあずかるものとなったこと。さらに、神様のみ言葉の確かさを知り、来るべき素晴らしい永遠の世界があることを知ったこと。どれも特別な人たちだけが経験できるものではなく、神様を信じるすべての者たちが招かれている経験です。

しかし、このような驚くべき経験へと招かれていながら、信仰を失ってしまう人たちがいます。聖書を開けば、その事例に事欠きません。たとえば、エジプトで奴隷状態にあったイスラエルの民たちが、希望の光に照らし出され、神様の驚くべき奇跡を通して、闇から光に救い出されました。それにも関わらず、カナンの地を偵察した後、不信に陥り、エジプトで経験した神様の力をすっかり忘れてしまったのでした。

【月・回復できないこと】

ヘブライ人への手紙6章6節では、このような素晴らしい救いの経験をした者が、「その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません」と書かれてあります。ヘブル6：6は難解な聖句の一つと言われているが、まず墮落という言葉の正しく理解しておく必要があります。この言葉は、背教とも訳される言葉で、天においてルシファが墮落したように、完全に神様から離れてしまうことを意味しています。神様から完全に心が離れてしまった者は、そもそも悔い改め、つまり神様のもとに立ち返る必要を感じなくなってしまうのです。

しかし自分の罪深さを悔い、涙している者は、主に何度でも立ち返ることができます。7の70倍まで赦されます。それでも気を付けなければならないのは、ペトロの手紙2章20節にあるように、「わたしたちの主、救い主イエス・キリストを深く知って世の汚れから逃れても、それに再び巻き込まれて打ち負かされるなら、そのような者たちの後の状態は、前よりずっと悪くなってしまうことです。罪は徐々に蓄積し、後戻りできなくなってしまふほどにまでなってしまうないように、注意しなければなりません。

また、一度神様から救いの光を受けた者が墮落した場合、再び悔い改めることができない理由として、それは「神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです」と書かれてあります。つまり、キリストの十字架は一度きりということです。エレン・G・ホワイトは、人類のあけぼの下P238で次のように言っています。「すべての罪人の中で、天が人間の救いのために与えた手段を軽べつし、「またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにする」者が最も罪深いのである」

【火・故意の罪のためのいけには残っていない】

ヘブル10:26に、「もし、わたしたちが真理の知識を受けた後にも、故意に罪を犯し続けるとすれば、罪のためのいけにえは、もはや残っていません」と書かれてあります。このみ言葉では、先のヘブル6：6で「墮落した場合」とあるのを、「故意に罪を犯し続けるとすれば」と変えています。つまり、故意に罪を犯し続けるということ

は、墮落している、神様から完全に離れてしまっていることを意味しているわけです。罪の力に抵抗できず負けてしまうのと、故意に罪を犯すのでは全く違います。そもそも罪とは、神様に背を向けることを意味しています。ということは、故意に神様に背を向けるということであるわけです。

ヘブライ人への手紙 10 章 29 節では、故意に罪を犯す者の具体的な姿を、「神の子を足げにし、自分が聖なる者とされた契約の血を汚れたものと見なし、その上、恵みの霊を侮辱する者は、どれほど重い刑罰に値すると思いますか」と言っています。彼らは、神の子を足げにすることは、イエス様のご支配を拒否することを意味しています。イエス様の十字架の血を汚れたもの、意味のないものとみなします。聖霊の悔い改めへの促しを拒絶します。これが一度救いの恵みを経験した者たちが墮落した姿なのです。

【水・もっと良いこと】

ヘブライ 6 章 9 節になると、「愛する人たち、こんなふうに話してはいても、わたしたちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています」と展開します。実は、著者が意識していた墮落した者たちとは、この手紙を受け取った信者ではなく、教会から離れていった人たちであり、実際に間違った教えを信奉する背教者たちが少なからずいたのです。しかし、教会の信者たちに対しては、9 節で「救にかかわる更に良いことがある」。10 節では、「神様はあなたたちの働きや御名のために示した愛をお忘れになることはない」と励ましています。そして、「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです」（ヘブル人 6 章 12 節）と続けます。悪い例を挙げた後に、あなたがたはそうではない。でも、こうあってほしい。あなた方も墮落することのないように、と続けているわけです。そのこうあってほしいという点は、「あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となる」ことでした。墮落するものたちの特徴は、怠け者であることです。この怠け者というのは、神様の愛によって突き動かされる信仰の行いが欠落していくことを言っています。この世のことに熱心でも、神様のことには熱心ではなくなってしまう状態です。見習うべき模範はたくさんいます。信仰の成長のために、聖書に登場する信仰者たちを見習うことがすすめられています。彼らも完全ではありませんでしたが、様々な困難の中で神様にすがりながらその信仰を成長させています。どのように信仰の歩みを続けたらよいか、彼らから学ことができます。

【木・魂の錨なるイエス】

信仰を持ち続けることには確かに忍耐と努力が必要かもしれません。信仰者たちが墮落することなく、信仰を持ち続けていくことができるようにと、希望の言葉で 6 章は締めくくられています。まず、6 章 17 節に、「神は約束されたものを受け継ぐ人々に、御自分の計画が変わらないものであることを、いっそうはっきり示したいと考え、それを誓いによって保証なさったのです」とあります。永遠の御国を受け継ぐということは保証されているという励ましです。しかも、神様のご計画が変わることがないということ、契約によってはっきりと示されました。一度結ばれた契約は、私たちが約束を破らない限りずっと有効なのです。

また、この御国に入ることができることの保証は、「イエス様が、わたしたちのために先駆者としてそこへ入って行」（ヘブライ人への手紙 6 章 20 節）かれたことでも確認できます。イエス様は私たちの先駆者として、天に戻られたのです。私たちはそのあとに続いて、入っていくことになります。

このように永遠の御国を受け継ぐことが保証されていることは、わたしたちの希望となり、その希望は、「魂にとって頼りになる、安定した錨」（6:19）となります。私たちの信仰や生き方がキリストにあって安定するのです。もし、日々の生活において、心が落ち着かない、いつも不安という場合、キリストという錨を心にしっかり下すことが大切です。